

父、常蔵の職業が理容業であるために、赤坂商業学校卒業と同時に入店、理容の道に入る。同店で修業。四、昭和十五年春施行の東京都主催による理容国家試験を受験する。同年七月合格、理容師となる。

五、昭和十六年春まで東京市港区赤坂新町三丁目五番地にて、宮沢常蔵と共に理容業に従事する。当時の家族構成は四人。宮沢常蔵、母宮沢すい、本人と弟の宮沢繁蔵の四人家族であった。

(神奈川県 片山 正二)

シベリア抑留体験記

新潟県 片桐 貞 夫

新潟県南魚沼郡六日町大字六日町一三九番地に正十四年十二月三日、生まれる。

六日町立尋常高等小学校高等科二年卒業。六日町立青年学校本科(昼間制)五年卒業。

昭和十五年八月、理研六日町鉄工所へ機械工として

入社。同十八年七月、新潟鉄工所へ合併される。

家族は、父母、私が長男で弟三人、妹四人の十人家族であった。

家業は、父が魚沼タクシー六日町営業所を営んでいた。

昭和十九年徴兵志願し合格。同二十年二月、召集。大阪天王寺集合で関東軍一〇二部隊へ直接入隊であった。

満州国阿城に本隊があり、四五ミリ野戦重砲を二門持った野戦重砲隊で、指揮中隊、一中隊、二中隊の三個中隊編成の部隊で、部隊長は秦中佐であった(後に関東軍参謀となった)。

私は指揮中隊に所属していた。

昭和二十年五月、牡丹江より少し南下した鏡泊湖畔に陣地構築のため派遣を命ぜられた。

一、二中隊で重砲一門の陣地構築をするため、指揮中隊から三〇名くらいが現地に参加、観測班、有線班、無線班などの装備であった。

七月には装備が完全に終わり、いつでも戦闘態勢に

入れる準備で待機していた。

八月九日夕方、ソ連爆撃機が三機ほど樹上すれすれに飛来する。操縦士の顔がはっきり見えた。無線班より連絡が入り、本日ソ連軍が国境を越え満州に侵攻したと情報が入った。

翌日は全員召集がかかり、少し詳しい状況報告を小隊長から受け、いつでも迎え戦える状態で待機に入った。私たちの陣地は満州の中部にあったので、ソ連軍が侵攻してくるのに早くても一週間くらいかかるだろうと、比較的落ち着いた気分以待機していた。

八月十五日午後二時過ぎだと思いが無線班の戦友がそっと、「片桐、今日正午に玉音放送があり日本は戦争に負けたようだ、まだ詳しいことはわからない、だれにも言うな」と知らされた。何か体の力が抜けてしまったような一瞬、「そんな馬鹿な」と言い返したが、戦友は首を振って何も言わなかった。

夕方仲間にそっと伝えたが、みんなが「敵も攻めてこないのに馬鹿な」と、あまり本気にはされなかった。翌十六日正午に派遣隊全員に集合がかかった。何か

不安だった。

当時、部隊長の泰中佐は関東軍参謀として出向しており、留守部隊長は小幡大尉が代理していた。全員集合の場で小幡部隊長から伝達されたのは、「昨日十五日正午、日本陸海軍は連合軍に無条件降伏をし、天皇陛下が全国民にラジオで放送された、戦争は終わった」一瞬ざわめいたがすぐに沈黙した。

部隊長から「次の指示が出されるまで今まで通り待機するように、全員、絶対に短気を起こしてはならない、わかったな」と命令された。

翌日からは、それぞれの胸の中はわからないが、表面は今までもおりの平常に戻ったようだった。

二三日たって吉田伍長が二人ほど連れてどこかへ出かけた。夕方、吉田伍長がヤンマーエンジン付の船を二隻、エンジンをかけて曳いてきた。近くに駐屯していた工兵隊が残っていたんだろうと言っていた。

陣地の周りは湖で、脱出用にと保管した。

十日ほどして、ソ連軍が明日武装解除に来るという連絡がきた。「どんなことがあっても我慢するように、

絶対手出しをしてはならない、これは命令だ」と小隊長から伝達があった。

それからすぐ小隊長に呼ばれ、「大至急俺の言うようにやれ」と。それは、小銃三〇挺ほど、軽機関銃一挺、軍刀、銃剣等を毛布五、六枚にくるみシートで梱包、穴を掘って埋めるようにということだった。兵舎から離れたところに戦友の手をかり埋めた。

翌日昼ごろ、我々が緊張しているところにソ連兵がボートで乗りつけてきた。

ソ連軍は将校が二人、兵隊が十人ほどだった。将校は腰にけん銃をつり下げ、兵隊はそれぞれ自動小銃を持っていた。

日本人通訳らしいのが一人ついてきて小隊長に、武器を全部出さないかと命令した。

残りの武器は小銃一五挺くらい、軽機関銃一挺、重機関銃一挺、銃剣少々だった。ソ連の将校が少ないと言っていたようだが、野戦重砲で大砲一門、弾薬等は別のところにあるとそこに案内し、納得したようだった。

夕方、ソ連兵は武器を積んでボートで引き揚げて行った。

二、三日後、小隊長から「今日夕刻、陣地から脱出する用意をしておくように」と命令が出た。

夕方何回かに分かれ、工兵隊の船で対岸に上陸した。何人かが偵察に行き、近くは異状はないということで上陸地点で夜営することにした。我々はまだ、小銃こそ持たないが、かなりの装備を身につけていた。

小隊長から「服は良いものを着てできるだけ身軽になれ」と言われ、みんなの出した物が幾山もできたが、みんな燃やしてしまった。

翌朝から行軍が始まった、運がよければ港に出て帰れると念じながら、先の見えない不安の行軍だった。

二日目の昼過ぎだと思ったが、騎馬のソ連兵がぼつぼつ目についたと思ったら「全員止まれ」と号令がかかり、全員座り込まされた。各方面から来た日本兵で、見渡す限り広い原っぱに数えきれないっぱいの兵隊だった。ここで再度の武装解除。兵隊が私物までひっくり返し、裁縫用のハサミまで取り上げた。

女性の将校が来て、「戦争は終わりました、皆さんはここで武器や刃物など一切出してソ連軍の保護下に入ってください」と言う。

そこからは小隊のままで、ソ連兵が自動小銃を持ち隊列に四〇五人ずつ付いて行軍した。

夜になって着いたのは大きな陸軍の兵舎の跡だった。翌日になって聞いたら牡丹江の兵舎跡ということだった。

昼ごろ、ソ連の将校が来て、「君たちはここで帰国の列車を待ち合わせるが数が多いので時間がかかる、その間、労役を手伝ってもらおう」ということだった。

翌日からは毎日同じことの繰り返し。たくさんあった倉庫の屋根のトタンはがし、食料（米、大豆、麦など）の貨車積み等が仕事の内容。満州全土から集めたと見えて、その量は莫大な量だった。送り先はみんなソ連だったそうだ。

一カ月余りたったころ、帰国という話が出始めた。何日か後に「今夕、帰国の途につく」という指示が出て、五〇両ぐらいの編成の貨車に乗せられた。行き先

はどこか、みんなは国へ帰れると期待に胸を膨らませていた。

一昼夜くらい走ったと思うころ、夕方停車した。だが海だと言った。たしかにぼんやり海らしいものが見えた。喜びもつかの間、戦友の中にロシア文字の読める人がいて、やっぱりここはハバロフスクだ。「えー、そんな馬鹿な、日本へ帰るんだろ」とだれかが言ったが、他の者は何も言わない。

走り出した列車が南下するのを望みながら、だが、間もなく観測隊の兵隊が星を見ながら、北へ向かっている、ソ連へ連れて行かれて自分の穴を掘らせられ墓の下だ!!

だれも声を出す者はいなかった。正直に日本へ帰ると思って乗り込んだ列車だったが、あまりのことにだれもが放心状態だった。

列車は一昼夜に一回くらいしか止まらなかった。その都度、黒パン一かけらが渡された。飲まず食わずに近い状態。狭い貨車の中で寝ているよりどうしようもない。列車が止まったのは出発してから十二、三日目

くらいだと思ふ。

列車の外へ出て、もよいと言われて外へ出たが、ふらふら、背中と腹の皮がくっつくと言われたが、そんな状態だった。中には動けないのも大分いたようだ。降り立った所は氷が十センチくらい張っていた。マイナス二〇度くらいだったと記憶している。寒々とした原野と森林地帯、ここが話に聞いたシベリアかとかっこりしてしまった。

帰国を夢見て列車に乗り、着いた所は酷寒のシベリアだった。故郷を思い出して何とも言えない気持ち、明日の自分がどうなるのかだれにもわからない、ただ不安が募るだけだった。いよいよシベリアの抑留生活が始まる。

最初の収容所は、タイセツトから一九キロの付近だと聞かされた、一九ラーゲルと呼んでいた。着いたときは全員弱っていて、一週間くらいは薪集めをさせられた。

どんどん日本兵が送り込まれ、大体四千人くらいいたと思う。兵舎は幕舎で、真ん中に暖炉が置いてあり、

薪を燃やす大きいものであった。二段ベッドで床は白樺の組丸太が並べてあったが、満州から持ち込んだアソペラが一枚敷いてあるだけ。慣れるまでは背中に丸太の跡が着いているのかと思うような状態で、しかも頭の方は防寒帽をかぶっていないと凍りつくような寒さであった。

作業が本格的に始まった。松の木を伐採し薪をつくる仕事だ。ノルマが課せられ、長さ一メートルに切って一人三・五立方メートルだった。

ノルマの達成者は一人もない。一立方メートルくらいできるのが良い方であった。自分たちの幕舎は三〇人余りだった。そのうち下士官が五人くらいいて、ノルマは全員の人数で割られ、下士官は作業をせず監督を取りでぶらぶら、中には兵隊に気合をかけている者もいた。

武装解除以来同じ部隊のままの編成だったので、まるで軍隊の延長であった。ここでの作業が一番きつかった。作業は兵隊に任せ、食事になれば自分たちが一番最初に兵長に盛り付けをさせ、残りが自分たちに配ら

れた。一番若い私が半年くらいでアバラの骨が一本ずつつかめるほどやせて、一カ月休養を命ぜられた。

戦争が終わっても毎日下午士官に気合を入れられながらの重労働、何とも言えない気持ちの毎日だった。

工曹長を作業班長として、三〇名余りの作業隊だった。実際に作業する者は二〇〜二五人くらい。前にも述べたが、三〇人分からのノルマを二五人くらいでやるわけだから一人当たり四立方メートルからの作業量、まず不可能と言ってよいノルマだ。しかも冬になれば零下四〇度近い寒さが毎日続く。一メートルに玉に切って斧で割るのだが、松の木のコまで凍っていて斧で叩いてもはね返るだけ。しばらく力いっぱい叩いていると、凍っているからスパッと割れる。一つの玉を六つくらいに割る。これが大変な重労働だった。

高さ一メートルに三・五メートル並べてノルマの検査は終わるが、完全にできる者はいない。半年近くこの作業が繰り返された。抑留中ではこの作業が一番つらかった。仲間が何人も体を壊した。俺もその中の一人だった。

一個作業班には必ずソ連兵が自動小銃を持って四、五人、監視でついている。彼らも日本兵がこわいのか、口もきかずに遠巻きに一日監視している。

春ごろから作業が鉄道の保線作業になった。線路の曲がりの手直しや枕木の交換などが主なる作業であった。薪割りよりは少し楽だった。きついノルマはなかった。

このころから、量は少ないが食料はいくらか落ち着いてきた。

初めての夏、白夜というのか夜は十二時過ぎまで明るい。どうしても寝不足になる。

このころから、一部の者が、夜二時間くらいずつ勉強会があるそうだが、内容は、政治学校と文化学校だということだった。時間をもて余していた私は政治学校に入った。講義の中身は、ソビエト共産党史を勉強させられた。日本人の講師が分厚い冊子を配り、中味を見ないでページごとの解説をしてくれた。この一冊暗記をしている者がいる、すごいなあーと感心した。適当に講義を聞き、何カ月が終了した。

このころだったと思う。戦友が、ある人に頼まれた、収容所の中で民主運動というのが始まったそうだ、片桐を誘ってくれと言われた、俺が引き会わせると。夜みんなが寝てからそっと外へ出た。そこにA伍長がいた。同じ指揮中隊にいたんだが、班が違ったのであまり馴染みはなかった。

A伍長から聞かされたのは、「戦争が終わって一年もたつのに軍隊のままの階級でいばっているなんて通用しないんだ、我々はみんな日本人なんだ、階級も要らない、上も下もない、みんな平等なんだ、お前も力を貸してくれ、収容所の中に広げたい、まだ当分は内緒だよ」と言われた。階級でいばっている連中に反発を持っていた私は仲間に入れてもらった。

取りあえず壁新聞を出すということだった。みんなが寝てから空倉庫みたいな所に集まって手伝った。内容は「戦争は終わった、軍隊は解散なんだ、階級でいばっているのは通用しない。我々はみんな平等なんだ、みんなで力を合わせて元気で故郷へ帰るんだ。一時も早く日本へ帰れるよう収容所の全員で考えてくれるこ

とを訴える」というような中味だったと思う。

A伍長は大学時代はロシア語を専攻したんだそうで、ロシア語はペラペラだとか、早速暇を見てはロシア語の単語を教えてもらった。半年近くで日常の用はロシア語で通ずるようになった。

秋ごろには、収容所の中でも民主主義を言う仲間が随分多くなっていた。今までいばっていた連中が少しおとなしくなったように感ずるようになった。

年明けが来て寒い日が続いていたころ、急に帰国（ダモイ）と言う声が聞こえ始めた。ああ、やっと日本へ帰れるかと、心の中では躍り上がって喜んでた。

一月の末だか二月初めのころだと思うが、全員の身体検査が行われた。

しばらくして、病弱の者は今寒い時期なので健康の者を先に帰すそうだ、三百人くらいだ。

だれ彼となくそんな話がみんなに伝わった。ちょっと不審に思った、帰すならなぜ病弱の人たちを先に帰さないんだろうと。後になってわかったことだが、これらのデマは、民主運動が広まって自分たちの身のこ

とを考えた下士官や将校の策謀だった。

いよいよ帰国だと言って選ばれたのは、健康の者約三百人くらい、そして思い当たったのは民主運動に加わっていた者が大半だったからだ。

不逞のヤカラと銘を打って追い出しの策謀に乗せられてしまった。夜になってから貨車に乗せられ、一晩中かかって五〇キロくらいしか走らなかつたようだ。

朝列車から降りて行軍が始まった、二月の末だったように思う。かなり重い装具を背負って雪中行軍、夕方どこかの収容所のようなところに着いたら、ここではない、今日はここに一晚泊まるということだった。

翌朝出発するときには半分くらいになっていた。足を痛めた者、熱を出した者、具合の悪い者、この者たちは後から行くので出発すると、また行軍が始まった。夕方ごろに、「いいか、お前たちは今日からここだ」と言われた。ソ連軍の少佐が責任者だった。

見渡す限り白樺林、どこに寝るのか、寝るところは各人で用意するようにと。目的地に着いたのは一三〇人くらいだったと思う。五、六人ずつ分かれて仮小屋

を造り、白樺を切って三角小屋を暗くなるころまでにようやく造り、真ん中で焚き火をたき、防寒具を着てのごろ寝だった。

仮小屋が一週間も続き、みんなはかなり弱っていた。雪解け水で食料や幕舎が届かないということだった。その何日か後によく幕舎と食料が少し届いた。

転属させられた私たちは先乗りをして、後から来る者たちの兵舎を造るのが仕事の中身だと言われた。丸太造りの小屋の青写真の図面を見せられた。だれもが図面が読めないということで、結局私が作業班の責任者ということだった。

十五人くらいのグループを作る。材料は周りの材木どれを切って使ってもよいということだった。工具と言ってもノコギリと斧しかない、しかも大工の経験者はいるかと思ってもだれもない、大変なことになったと思いつながら、翌日から材料の伐採に入った。

一体どうなることかと心配したが、一カ月くらいで丸太造りが一棟出来た。ソ連の少佐が良くできたとはめていた。いままでの仕事と違って、ここの仕事はそ

んな重労働ではなかった。入村するときに残した仲間がいつ来るかと心待ちにしていたが、とうとう来なかった。

秋ごろまでに十棟ほど出来上がった。一棟は入浴場だった（浴場と言っても、湯を沸かし、みんなが桶一杯の湯をもらって行水するだけ）。

自分たちの造った小屋に住むことになった。一棟三〇人くらい入れる建物だった。素人の集まりでよくこんなことができたと自分でも感心した。やる気になれば何でもできるんだなと、いい経験をした。

ここはタイセツトから百十キロくらいのところだそうだとだれかが言っていたが、定かではない。十一月ごろだと思ったが転出命令が出て、五〇人くらいだと思うが、次のラーゲルへと移動した。歩いて二―三時間くらい、十キロ足らずのところだと思う。

ここの収容所は三百人くらいだったと思う。作業の内容は、谷の埋立てと、山を一つハッパで飛ばすんだということだった。

最初は、トラック七―八台で土砂を機械で積み込み、

谷を埋める仕事。私は、機械積みで、バケットでたかれるのか、トラックのボディが壊れてその修繕だった。前の収容所で建築をやったので、そんな仕事をさせられたと思う。

間もなく、山を二カ月くらいで飛ばすということだった。谷の埋立ては二カ月で終わり、車両班の人たちは移動していった。

山に二メートル角くらいの穴を掘り、火薬で飛ばすということだった。つるべ掘りとか、天秤掘りと言っていたようだ。井戸のような（二メートル×深さ一〇メートル）穴を二十カ所くらい掘り（約二カ月かかった）、六〇トン貨車に三十両くらいきた火薬を仕掛け、四キロ四方、全員退避命令が出され、翌日正午爆破だった。

ドーンとにぶい音がして煙がもうもうと上った。夕方に解除命令が出て現場を見に行った。幅二〇メートルくらい、長さ百メートルくらい、山が飛んで掘割が出来ていた。すごいことをやるもんだとみんな驚いた。ここの作業はこの大仕事が終わわり、私たちはまた、

次のラーゲルへと移動した。

徒歩で半日くらい、ここは千人くらいの仲間がおり、一二キロラーゲルと言ったようだ。

一棟の中に百二十人くらいいたように記憶している。ここでまず、私たち百人余りが新しく入ったということで、寮長の選挙をすることだった。なかなか民主的なんだと驚いて、初めて会った隣の戦友にどうするのかと聞いたたら、今度新しく来た中に片桐と言うのがおるから、その名前を書くようこの収容所の団長に言われていると聞き、またびっくりしてしまった。

選挙の結果は、私に百票くらい入ったようだった。

団長に呼ばれて「よろしく頼む」と言われ、ちょっと待ってくださいよ、私は昨日来たので何もわからない、どうしてこんなことに」と聞いたたら、「片桐、お前の経歴がきている、政治学校を出たり、民主運動に早くから頑張ってくれたようだ、ここは民主的にやっているところだから仲良くやろうよ」と言われ、また驚きだった。

別に何をやったわけでもないのに、経歴なんてどう

やって、どこから伝わったんだろうとソ連の情報網に感心した。

この収容所では、最初伐採を手伝い、少し慣れたころから鉄道の保線の作業になった。三〇人くらいで、私が作業長だった。

このころからは、一日何本かの列車が不定期で走っていた、客車が二両くらいに貨車が四〜五両くらいの編成だった。

ここが私の最後の収容所となった。

この収容所は、今まで転々としてきたどこよりも食べ物もまあまあだったし、仕事もみんなが協力してノルマもそんなにきつくなかった。団長の人柄と、民主的にやっていることがみんなを明るくし、やっと落ち着いたという気がした。考えれば、ソ連に抑留されて三年たったんだものなあと、しみじみ考えた。あの酷寒の中（零下四〇〜五〇度）、よく厳しい作業に耐えられた、よく今日まで生きられたとしみじみ考えた。

ここでは心の余裕もできて、みんなで楽しく作業を

することができた。夏の日長でみんな退屈して、私が毛布のきれで手袋みたいなのをつくり野球を始めた。みんな喜んで夜の十時過ぎまで飛び回った。十二時過ぎにならなければ暗くならない白夜、みんな楽しかったようだ。

このころには、隣の収容所は帰国したそうだとだれかが言い、近いうちにみんな帰れるようだと言報が流れていた。待ちに待った帰国命令が来たのは七月に入ってからだった。みんなに伝えたら躍り上がって喜んだ。仲間の顔が今でも思い出される。

翌日の夕方列車が入り、全員乗り込んだ。列車の走り出したのは暗くなるころだった。貨車の四〇両くらいの編成だった。十二〜十三日くらい乗ったと思う。着いたのは海の見えるナホトカだった。やっと日本へ帰れると実感がわいてきた。

乗船待ちということで十日余りナホトカで軽作業をし、乗船したのは八月一日ごろだった。

「明優丸」に乗船、舞鶴に着いたが、何日か船の中で待たされ、上陸したのは七日ごろと記憶している。

復員した時は、戦後の混乱が落ち着き始めたころだった。苦しかったり、悲しかったり、嬉しかったり、さまざまな生活をしながら今日まで生き抜いた。ソ連での苦しみが私の人生のよい教訓となった。昭和二十年十月入ソして、二十四年八月に復員した。今、元気でいられることに感謝している。

少年兵の生と彷徨

大阪府 西 本 英 明

我が百二十六師団歩兵二百七十七連隊津端隊は、陣地構築のための先発隊として、東満の山中にテントを張り宿営中だった。

まだ他の隊や本隊が来ておらず、夜は野獸よけに焚き火をし歩哨に立つ。敵の襲撃に、いつでも応戦できる態勢で、森閑とした山中での歩哨一時間は長く感じる。このころ武装諜者が、頻繁に出没するという情報が入り、気の抜けない状態が続く。やっと連隊の主力